

「の夏、一念発起して、富士山に登り、頂上からご来光を眺めました。神々しい朱色の世界を堪能し、すがすがしい気持ちで、富士山の裾野に広がる緑を見下ろしながら下山していると、「ズドーン、ズドーン」と鈍く、重い迫撃砲の音がするではありませんか。ドキッとしました。そう、近くには、自衛隊の演習場があるのです。子ども連れで登っていた人たちも結構いましたから、この「ズドーン」を耳にして不思議に思った子どもたちもいたことでしょう。富士山登頂からの心地よい疲労感でホワーンと緩んでいた気持ちにピシッと引き締まり、バルカン半島の旧ユーゴスラビアのコソボで働いていた頃のことを思い出しました。「コソボ」「ミロシェビッチによる民族浄化」「NATO軍によるセルビア空爆」と聞いてピンと来た方は、かなりの「通(つう)」です！ミロシェビッチ体制のセルビア当局が、コソボのアルバニア系住民を民族浄化の対象として弾圧し、これを止めるために1999年3月から3ヶ月に亘ってNATO軍が空爆を実施。同年6月のコソボ和平後、コソボは国連の管理下に置かれました。

私は、同年11月から国連難民高等弁務官事務所(UHCR)の職員として2年間コソボに駐在。弾圧や空爆で避難した何十万人ものアルバニア系の人々が再びコソボに帰り、戦争で破壊されてしまったふるさとで人生を再スタートするのをお手伝いする——というのが、当初の任務でした。しかしながら、アルバニア系の人々が、セルビア系の住民らに、これまでに受けた仕打ちへの復讐を始めたのです。セルビア系の人々らが脅迫、放火、暴行、誘拐、そして殺害の対象になってしまい、こうした事件に振り回されてしまいました。人々の悲しみの涙、そして、民族間の憎しみの言葉に触れる毎日で、自分の無力さに意気消沈していました。子どもたちはというと、当然、大人たちが敵対する民族をののしるのを日々耳にしているわけですし、また、壊れて放置された戦車をジャングルジムがわりにして遊んでいました。暴力で物事を解決することが当然の如く行われ、銃撃や爆発の音を耳にし、破壊された家々がそのままにされ、至るところに、コソボを守る目的で派遣されていた「国際安全保障部隊」がいました。コソボに平和をもたらすためには、武器を持った外国の兵士たちが、町をパトロールし、検問し、生活の

隔々に「侵入」している——何だか、生活全体が「迷彩色」だったように感じます。「武力」と「暴力」と「憎しみ」に囲まれた環境の中で育つ子どもたちは、一体、どんな心を持つようになるのでしょうか。武器を見ることがまずない日本生まれ育ったことを、本当にありがたく思いました。「うちの子どもも含めて、日本の子どもたちには、こうした状況が世界には

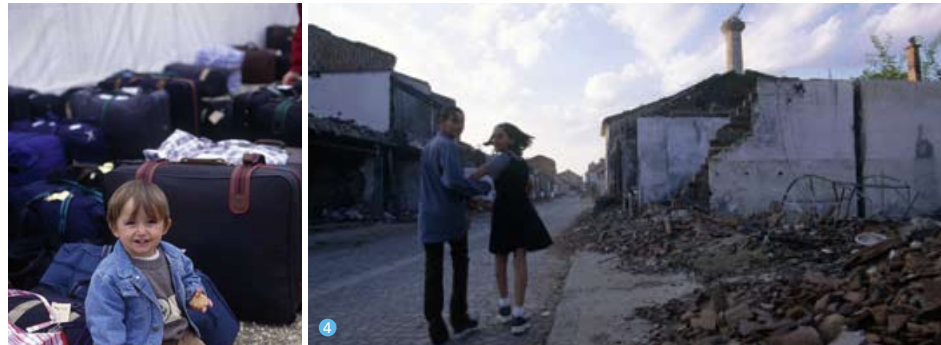
## volume 4 世界の子どもたち 楽曲『ワンダフルワールド』に 込められた「ゆず」の想い、 広がる想いの輪

武力、暴力、憎しみに満ちた日常を過ごすコソボの子どもたちは、傷付いた心を抱いて、どんな夢を見るのだろうか？  
国連難民高等弁務官事務所(UHCR)の公式支援窓口、日本UNHCR協会事務局長の根本かおるさんの想いは、人気ユニット「ゆず」の歌声によって、おおぜいの人たちへと広がっている。

文…根本かおる

あるということをもっと知ってもらいたい——日本の子どもたちがいかに恵まれているかについては、アフリカの最貧国の一つ、ザンビアを今年訪問した際、お連れした日本の企業の方々にもこのように実感していただくことができました。

訪問した学校は、政府の正規の学校ではなく、地元コミュニティの人たちの手によるもので、床も無く、壁と屋根があるだけ。建物は傾き、かけて



①楽曲「ワンダフルワールド」で世界の子どもたちを支援するゆず。②ザンビアの子どもたちが楽しみにしている給食の時間。③破壊された家の前に佇むコソボの女の子(1998年)。④故郷のコソボへと帰還する(1999年)。⑤内戦で破壊されたコソボの町並(1999年)。  
1.写真…木村篤史©セーニャ・アドカンパニー 2.©日本UNHCR協会 3.©UNHCR/U.Meissner 4.©UNHCR/H.J.Davies 5.©UNHCR/H.Caux

三角形になってしまった黒板を後生大事に使っていました。先生たちから説明を受けていると、「チリン、チリン、チリン」というベルの音とともに、「ワッ」と子どもたちの歓声が上がり、給食タイムの始まりで、粉を水で溶いたおかゆのようなものを、飛んできて列に並んだ子どもたちによそっていました。この学校では生徒の半分以上はエイズで親を亡くし、この給食が一日で唯一の食事という子どももいるそうです。

朝の光に包まれた少女は、優しい母の声を目を覚ます。で始まる「ゆず」の楽曲「ワンダフルワールド」は、こうした日本の子どもたちの状況からはかけ離れた紛争やとてもない貧困の中で、たくましく生きる世界の子どもたちへの応援歌です。難民問題や私たちの活動に関心を持ってくださった「ゆず」の北川悠仁さんに曲作りの過程でお会いし、コソボで見た子どもたちの

姿や、家族の生活を支えるために売春せざるをえなかった難民の少女らのことを踏まえてお話しする機会がありました。多くの人々の話を吸収して作られた「生まれたその瞬間から矛盾を抱え生きてゆくのなら、神は何の為にこの世界に全ての命を与えたんだろ？」という詞は、「生きる」ことへの根本的な問いかけとも言えるでしょう。先日、その「ゆず」の横濱アリーナでのコンサートに行ってきましたが、10歳にもならない子どもたちから、いわゆる「後期高齢者」まで、観客の層

は幅広く、もしかすると、親子三代で観に来たご家族もいたかもしれません。心を揺さぶられたのは「ゆず」のコンサートで、「ワンダフルワールド」の演奏が終わってから、観客が自然発生的に「ワンダフルワールド」を歌い出し、アンコール登場まで歌声がずっと続くと、という光景を見たときでした。「世界よ今日も回れ回れ、君と僕を繋ぐ。未来へ向けて進め進め、君も僕も生きてゆく」というメッセージが、世代を越えて、会場の1万4千人のところに届いた瞬間に立ち会うことができ、心が震えました。

こうしたご縁で、楽曲「ワンダフルワールド」の印税の一部、そしてツアー・グッズの収益の一部をもとに、「WONDERFUL WORLD 基金」が立ち上がり、世界の難民キャンプでの植樹活動に活用されることになりました。「ゆず」のお二人の想いと、それに共感してくださった皆さんのお力添えとで、たくさん「たね」がどのように育っていくのか、楽しみです！



根本かおる

ねもと・かおる ●東京大学法学部卒。テレビ局入社後にフルブライト奨学生としてコロンビア大学大学院へ留学。修士号取得後、1996年からUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)勤務。トルコ、ブルンジ、コソボ、ジュネーブ本部、ネパール事務所などを経て、2007年6月より、UNHCRの公式支援窓口、日本UNHCR協会事務局長。

国連の難民支援にご協力ください。日本 UNHCR 協会 <http://www.japanforunhcr.org/>

